

ジャガイモと映画 (29)

<でん粉 (2)>

Web ジャガイモ博物館館長

あさ ま かず お
浅間 和夫

99. 女の泣きどころ

1975年、邦画。監督：瀬川昌治。

消防士の藤井（湯原昌幸）は救急車で駆けつけ、自殺未遂を起こした二人の女旅役者春風駒太夫（太地喜和子）とモンローこと竜子（中川梨絵）を救助する。それから一年。二人は、レスビアンコンビの売れっ子ストリッパーとなる。一方、藤井は夢をふくらませて退職金を懐に蕎麦屋でもやろうと大阪へ向かったが、突然、財津一郎刑事に呼び止められ、署まで連れて行かれる。かつて救命措置をただけなのに、公然ワイセツ物陳列罪で警察に留置されている駒太夫とモンローの身元引受人にされてしまい、その上、器物破損の弁償やら、保釈金も支払わされてしまう。どうにも腹の虫がおさまらない藤井は、二人に、あらゆる仕事を強制し、ストリップはもちろん、パレリーナ、お座敷ショーなどをやらせる。

この辺りで、駒太夫の昔の男・村上が現れ、おでん屋に寄るシーンがある。

「なあ。駒太夫よ。男と女は楽しいうちに別れるのが身のためよ。分るだろ」

「大丈夫よー。私こういうのには慣れているから。おじさん。ジャガイモと雁もどきと竹輪と半片ちょうだい」の会話。

舞台は大阪。おでんの具で人気のあるのは、大根、卵、こんにゃく、餅入り巾着、

厚揚げといったところだが、これに西日本では牛すじ、コーンスターチで餅のようにソフトな半片、東日本ではジャガイモでん粉を使ってプリプリ感を出した竹輪がほとんど加わっている。ジャガイモは、和歌山、大阪、神戸から広島にかけての瀬戸内海側では具として加える確率は他所より高めであり、北海道でも同様である。品種は煮崩れし難いことで知られる「メークイン」、「とうや」、「インカのめざめ」、「マチルダ」などがお薦めである。スーパーなどで売る『おでんセット』にはジャガイモは入っていない。しかし北海道の家庭では、汁を美味しくするため、これに前記の品種を加えたりしている。

映画の方は、この後、駒太夫が村上を追って消えるため藤井チームは御破算となる。しかし、藤井の商売上手は着実にモンローとの生活を安定させ、二人でアパート暮らしもできるまでになる。その後、駒太夫の方は村上に捨てられ、昔の仲間の弥生と「モンロー対バルドー」の新コンビを組む。藤井はこれらを活かしてプロダクションを結成し、稼ぎ出す。やがて、駒太夫は藤井と関係し、モンローのアパートへ引っ越して来るが、藤井は、二人を捨てて弥生のところへ逃げて行く... こんな根無し草達の艶笑喜劇的騒動が続く映画である。

100. じんじん

2013年、邦画。監督：山田大樹。

『ガマの油売り』を披露して全国を行脚する大道芸人・立石銀三郎（大地康雄）はすでに妻和子に愛想を尽かされ、松島での興行の後、幼馴染の農場の田植えを手伝うため北海道の『絵本の里』で知られる剣淵町（けんぶちちょう）へ飛ぶ。そのころ東京都立北原高等学校の生徒達も、体験型修学旅行で剣淵町を訪れる。銀三郎の親友高峰庄太（佐藤B作）は自身の経営する『天の川農園』へ4人の高校生佐々木ナナ、遠藤ヒロミ、西原ユカリ、日下部彩香を招く。銀三郎は農業体験に来ていた女子高生達と過ごし、打ち解けるが、日下部彩香（小松美咲）だけは彼に心を開かず、母の再婚相手にも同様である。

そんな時、庄太から、和子が再婚した相手の名字は“日下部”だと告げられる。娘の記憶が6歳で止まっていた銀三郎はようやく彩香が実の娘であることに気付き、激しく取り乱す。

後日、農協職員や役場の職員達は庄太へ、夏に開催される“けんぶち手作り創作絵本コンクール”の大賞が、東京の出版社と契約できることになったと伝えに来る。そして銀三郎は絵本コンクールに出品し優勝すると宣言し、空港へ向かう彩香へ「またおいで」と声をかける…

この映画でふれたいのが、銀三郎が「これを食べるために帰ってきた」と言っていた“でんぷん団子”のことである。人口約3,000人という小さな町にロケ隊が入ったとき、炊き出しする「ひまわり会」、でんぷん団子を焼く「福有会」などが協力した。現在販売されている“冷凍でんぷん団子”

は金時豆などが入り、凍ったままを、軽く油をひいたフライパンやホットプレートで、じっくり焼いて食べるものである（写真）。



写真1 でんぷん団子

第二次大戦の頃、北海道の農村家庭では、水分のある生でん粉の塊そのものを焼いて、 α デンプン化した表面を剥ぎながら砂糖醤油をつけて食べた。当時は勿論、北海道産ジャガイモの最大の用途別消費はでん粉（片栗粉）原料用向けであり、ついでポテトチップなどの加工用で、生食用（野菜）はその次だったのである。なお、現在剣淵町には上川北部農協合理化澱粉工場があり、国道40号線沿いには道の駅『絵本の里 けんぶち』が開かれており、人気がある。

101. シャレード（原題：Charade）

1963年、アメリカ映画。監督：スタンリー・ドローネン。

あるスキー場にジバンシィ提供の衣装を身に着けたレジーナこと富豪の妻オードリー・ヘプバーンがいた。

夫・チャールズとの離婚を決意して、パリに戻ると、家財道具一切が部屋から持ち

出されており、夫の姿も見えない。そこへ来た司法警察のグランピエールによれば、チャールズは家財道具のすべてを競売にかけ、その落札代金25万ドルを持ってパリ脱出のために列車に乗ったが、列車から誰かに突き落とされて死亡したという。途方にくれるレジーナをスキー場で偶然会った男ピーター（ケーリー・グラント）がホテルなどを世話してくれる。

警察署で、レジーナは夫の遺品を受け取る。小さなバッグに歯ブラシ、万年筆、レジーナ宛ての切手を貼った未投函の手紙などである。葬儀に見知らぬ男が3人現れる。頭の薄い小男・ギデオンと、背の高い痩せた男・テックス、それに右腕が義手の男・スコビーである。翌日、レジーナはアメリカ大使館に呼び出される。大使館の情報部長・バーソロミューによると、チャールズの本名はボスであり、葬式に現れた3人の男たちと共に、戦時中手に入れた25万ドルの金塊を隠匿していたらしいのだ。

やがてスコビー、ギデオンが何者かに殺される。実は黒幕はバーソロミューだった。レジーナに近づくためにアメリカ大使館の情報部長と身分を偽っていたのだった。

25万ドルは高額な切手に交換されて、レジーナに宛てた手紙に貼っていたのだった（スウェーデンの4シリング切手など3枚。写真）。レジーナは お金を返すため、切手を持ってアメリカ大使館を訪問する。そこ

で本当の大使館員に出会い再婚を決意する。



写真2 軽いが希少で高額な切手

切手が大切な役を果たす映画としてはこの「シャレード」が1番である。裏糊は1840年、イギリスで世界最初の切手が発行されたとき以来長い間日本国でもジャガイモでんぷんに由来するデキストリン糊が使われていた。これは湿気が多いと丸まり、くっつく欠点があった。このため20世紀半ばに主な成分が酢酸ビニル樹脂とポリビニルアルコール（PVA）の糊に変わっていった。PVAはジャガイモでん粉などを加水分解したとき、麦芽糖になるまでの中間過程で出来る様々の生成物の総称を言うが、粘着力が強く糊などに利用できるのも、糊精（こせい）とも呼ばれている。東南アジアなどでは雨期の季節があるので、裏糊なし切手の国があり、アメリカではシール式切手とし、ベルギーではチョコレート味の裏糊付き切手も知られていてる。